朝鮮石人像を訪ねて（67）

深田 晃二

～開城の高麗磁器の盗掘、昌徳宮美術館、古跡調査、文庫・史庫の古典籍～

去る 3 月 13 日に東大の韓国学研究センター主催「韓国文化財を考える講演会」－金達寿の活動とその広がり－日本学術振興会特別研究員・廣瀬陽一－が ZOOM で行われ聴講した。日本と朝鮮、日本人と朝鮮人の間に人間的な関係を構築する為に、「古代史における朝鮮隠し」及び「現代史における朝鮮隠し」を克服し、「日本人の自己腐食」からの脱却が必要であると主張された。皇国史観から脱却し、史実に基づいて思考せよと述べられたものと思う。

1．日帝時代の文化財略奪

石人像の魅力を知る者からすると朝鮮石人像は文化財であると思うが、文化財側からの視点では石人像は文化財として扱われることは少ない。

一般に言われる文化財の内、前号では開城敬天寺の多重石塔略奪未遂事件について見たが、今回は他の文化財について日帝時代にどのような略奪が行われたのか見ていきたい。（『この字体は引用部分』を示す。また引用文中の「･･･」は中略を示す。）

2．開城一帯の高麗磁器（高麗青磁）の盗掘 (1)

韓国・朝鮮社会の伝統的倫理から、王陵・民墓を問わず墓を掘ることは絶対に行われなかった。

『一般に朝鮮は･･･祖先への敬心深く、特に墳墓は大切にする習慣があり･･･夢にも、これをあばいて古い事実を極めようとか、あるいは古器物を発掘してこれを楽しむといった考えは、毛頭ない。』

日露戦争が終わった 1905 年頃から、一攫千金を夢見た日本人骨董商と掘り屋（盗掘専門者）が、高麗王朝の首都であった開城周辺の王陵や古墳群を手当たり次第にあばき始め、数年後絶頂に達した。

高麗焼（当時日本人は高麗青磁をこう表現した）は、内地から来た人や官を辞して去る人への贈り物として重用された。安重根にピストル射殺された伊藤博文は 1909 年に統監を辞したが、人に贈る目的で盛んに高麗青磁を集めた。「いくらでも持ってこい、あるだけ買ってやる」とか、有名骨董商の店の高麗焼をソックリそのまま買い取ったりして大量に収集した。選び抜いた逸品は日本皇室や華族への献上品として日本へ持ち去っている (4)。伊藤のこの様な丸ごと買い集めが刺激となって、高麗青磁狂時代が出現し、見境のない盗掘ブームがおこり、開城・江華島・海州方面の数多くの大小の古墳が盗掘された。

『伊藤博文は韓国の国家権力を完全に奪った侵略の最高指導者であった。そして、開城一帯の高麗古墳群の破壊と盗掘を助長させた張本人でもあった。それはまさに、かつて壬辰倭乱（文禄・慶長の役）の時、豊臣秀吉が武将に命じて行わせた大規模な文化財略奪と遺跡破壊の再現であった。』

また盗掘現場の様子については、次のように述べられている。各地に駐屯していた憲兵がかれらと行動を共にしたという話もある。

『三宅（長策）は、「盗掘の下手人は、いつも朝鮮人であった」とも言っている。それが事実かどうかはさておいて、もしそうであったとしても、銃を持った日本人[引用者注：盗掘集団]の脅迫と多少の金銭に惑わされて、やむなく加担したのだろう。･･･まんまとせしめた出土品で莫大な利益を得たのは、結局はいつも日本人だったのである。』

文献 4 では『古墳の盗掘を生業としたほとんどの日本人は、自国で食いつめ、朝鮮に活路を求めてきた浮浪者の類である。こんな人種にとって他民族の墓を踏み荒らし、死者を冒とくする行為にためらいなどなかった。むしろ支配民族の特権とばかりに時には銃で住民を威嚇して白昼堂々と墓を掘ったのである。これについても関野貞は「日本人は危ない（処罰）と思うと昼間見ていて夜掘るのです。又昼に行っても日本人の権威でかまわなかったらしいです」と言明している。』

また文献 4 には朝鮮陶磁器の研究者である小山富士夫が 1955 年著書で当時の状況について次のように（「」内）述べているとし、興味深い解説がしてある。

『「高麗青磁の大部分は近年高麗の古墳から出土したもので、･･･殆ど全ては明治末期以降の出土品である。･･･その後高麗陶磁の蒐集熱は年と共に高まり、明治 44、45（1911、1912）年頃には最高潮に達した。･･･高麗古墳の盗掘は絶えた時はなく、この間に、盗掘された高麗の古陶器はおびただしい数であろう。」又、小山論文で注目すべきは、日本人植民者が朝鮮に渡ってくる前には高麗青磁が一品たりとも地上に出現していなかった事を語っている。本来、高麗青磁は日常の雑器として使われた物ではなかった。高麗の王族や貴族の墓に神聖な冥器として、遺体とともに輻葬された遺物である。だから、朝鮮人は日本人が掘り出すまでは目にもしなかったし、手にとった者もいなかった。李王家でさえ、王家の伝来品の中に高麗青磁はなかった。』

同じく文献 4 には、浅川伯教の著書に、李王家美術館館長（李王職事務官を務めた）末松熊彦から聞

いたエピソードとして次のような記述があり、前の文章の裏付けとなる。

『「ある日、李太王様が（高麗青磁を）初めてご覧になって、この青磁はどこの産かとお尋ねになったとき、伊藤公（博文）がこれは朝鮮の高麗時代の物ですとご説明申すと、殿下はこういうものは朝鮮にないと申された。」伊藤は高宗の言葉に返答に困り口をつぐんだという。なぜならは、「（墓からの）出土品であると言うご説明はこの場合、できない」からだったと館長は話した。』

日本に持ち込まれた高麗青磁の出所はこれらの記述からこの時期に掘り出されたものである事が判る。

高麗青磁を所蔵する日本の博物館や美術館それに個人は「正当な手段と代価」を払って骨董屋から購入したと言うが、もともと副葬品として埋葬されていた遺物であり、おのずと有田焼や瀬戸物などの一般の陶磁器類と同様の商取引とは違った性格を持つものである。

日本にある石人像で高麗時代の物であると明示したものは見かけない。むくげ通信 278 号、訪ねて(44)で述べたが、中国唐代陵墓制度の影響を受けて統一新羅時代に石人像や石獣を、高麗時代には望柱石や長明燈を墓前の配置するようになったと李殷希の研究で知った。1910 年前後の開城一帯の高麗焼盗掘の際に周辺の石造物を集めたことも考えられる。今西龍の 1917 年「高麗諸陵墓調査報告書」を調べると手がかりがつかめるかも知れない。

3．昌徳宮美術館 ⑷

初代統監の伊藤博文は、親日派の李完用に命じて、王宮敷地内に李王家施設の美術館と動・植物園を創設させた。美術館の開設目的を前述の末松は「李王家御一家に趣味を供給し、あわせて朝鮮の古美術を保護、蒐集する」としているが、高宗は読書はかなりお好きであるが美術館にある古美術よりは、動・植物園の方を好まれたという。伊藤の真意は、朝鮮文化財の略奪とその受け皿を作ることにあった。

解放後に高麗青磁 6,562 点を接収した韓国中央博物館が調査した結果、99%が開城一帯の出土品であったという。開城一帯の王陵や貴族の墓所である古墳から日本人が盗掘してきた盗品であることがこのことで証明されている。

陵墓を無残にあばき、取り出してきたものをこの美術館の展示品とするため、李王家に高価に売り付けたことを「保護」と称した。美術館は 1,2 年で数千点を収集したと言うが、高価な買付金額で李王家は財政浪費を強制させられたという。

1910 年に総督府が設置されると、国家君主だった高宗の李王家を総督府の一行政機関の「李王職」に押し込めた。こうすることで、かつての李王家の美術品など全ての財産は、新しい国家である朝鮮総督府に所属する国家帰属品であるとして、昌徳宮美術館の展示品は全て 1915 年開設の朝鮮総督府博物館に吸収された。現在の韓国中央博物館の所蔵品は、かつての朝鮮総督府博物館の所蔵品を解放時に接収したものだが、見当たらない文化財が多いという。

移籍の際に紛失したか、もしくは解放直後に日本人が密かに持ち出したのかは不明とのことである。

4．古蹟調査委員会の発足 ⑷

1916 年 7 月に総督府は 3 代総督寺内正毅のもと「古蹟及び遺物保存規則令」を発布し、同時に「古蹟調査委員会」を発足させた。その目的は遺物の「保護と蒐集」にあり、「国家による秩序正しい調査」を行うところにあるとしている。

ところが、法令発布後も日本人の略奪は一向に収まらず、むしろ「規則令」が主犯である日本人の犯行を庇護し、脅迫でやむなく加担した一部の朝鮮人に厳罰を科す結果になったという。また総督府は日本人略奪者の盗掘と不法売買を寛大に見逃していた。

調査事業に当たり付属の「規定」や「心得」が策定されている。「調査すべき物件の種目、所在地、調査の方法及び時日を予めその地を管轄する道長官と警務部長に協議し、その調査についてはなるべく憲兵又は警察官のたちあいを求むべし」とあり、朝鮮人民を弾圧する事を任務とする警察や憲兵隊の治安部隊が深く関与し、「調査事業」の監督機関となっている。

これについて、韓国の李弘稙高麗大教授は 1964 年の著書で「調査事業はあくまで日本の学会の意欲を充足させることにあり、それは朝鮮民衆を啓発する為の文化事業とは無縁な性格を帯びていた」と指摘している。また。その目的は「日本が朝鮮を独占的に支配するために、憲兵や警察の動員が必要だった。そもそも古蹟調査に参画した事自体が『文化』とはほど遠い『事業』であり、本質は文化財の破壊と植民地収奪そのものの『事業』にすぎない」と述べている。

5．古蹟調査５ヵ年計画 ⑷

1916 年を初年度として 5 ヵ年で朝鮮全土の調査を実行している。調査の内容は、1. 先史遺跡と古墳（貝塚、竪穴、遺物包含層など）、2．史跡（都城、宮殿、寺など）、3．金石と他の遺物（仏像、石塔石碑、祭器、絵画など）、4．古建築物、5．古文書に分類している。各年度の調査対象は次の通り。

・1916 年　高句麗と「楽浪」の遺跡（楽浪を強調）
　　黄海道、平安道、京畿道、忠清道
・1917 年　三韓と伽耶及び百済時代の遺跡
　　京畿道、忠清道、慶尚道、全羅道
・1918 年　新羅時代の遺跡
　　慶尚道、全羅道
・1919 年　渤海、女真、沃沮（ヨクソ）などの遺跡

江原道、咸鏡道、平安道、中国東北地方

・1920 年　高麗遺跡の集中調査

京畿道全域

『1916 年に関野貞を責任者とする調査団の一行は、平壌の大同江流域に密集する高句麗と「楽浪」の古墳を暴き始めた。彼等は、これら「楽浪」の遺跡が中国・漢帝国の植民地時代の遺跡である事を強調し、「楽浪」を前面に押し出すことにより高句麗の遺物を打ち消そうとした。こうすることにより、朝鮮の自立的な歴史を否定しようとした。』

『当時、総督府が最も重視したのが伽耶地方での発掘だった。それは彼等が主張してやまない「任那日本府」の歴史的存在を考古遺物で実証しようという狙いがあったからだ。しかし結果はむしろ「任那日本府」の存在を完全に否定する遺物が古墳から出土するばかりで、これに慌てふためいた総督府は遺物の全てを日本に持ち帰った。』

現在、東京国立博物館にある出土地「任那」とある考古遺物は全てこの様な経緯で取得したものであるという。

6．文庫・史庫の古典籍 (1)(4)

「奎章閣」は 1776 年李朝 22 代王の正祖時代に創建された宮廷文庫である。ここには李朝歴代王の親筆や詩文、学者の遺稿、歴史と風俗に関する貴重な古書類が、36,565 冊（1908 年）収蔵されていた。

統監府政治が始まると、湿気にさらされている蔵書を「虫干しし整理分類する」として古書類を引きずり出し、日本から学者を呼んで品定めを行った。美術館と同じ手法で、これらの古書を収蔵するために大韓帝国帝室図書館を新設した。蔵書目録の一部は東京・駒込の東洋文庫に保管されているという。

奎章閣の蔵書の中に統監府の書類がまぎれていて、そこに誰も知らなかった書籍略奪の事実が記録されていた事が 1965 年に発覚した。略奪の張本人は伊藤博文で、皇室と華族の実録を編纂する上で参考にするとして、持ち出したのは 33 部 563 冊である。

伊藤に続く曽根荒助、寺内正毅らも朝鮮古書を蒐集し、日本皇室に進呈し、これらは宮内庁書陵寮が現在も所持しているという。

李王家が李王職になると美術館と同じく総督府に帰属するとして、1931 年に京城帝国大学図書館に移した。植民地経営の学術資料として大いに活用したという。美術館の場合と違って、奎章閣の古書籍は日本に渡らなかったので、現在はソウル大学図書館に収蔵されている。

李王家は盗難や戦乱による人災と地震、洪水等の自然災害で蔵書が損なわれないようにするため、深山幽谷の 4 ヵ所に史庫を持っていた。当初は 1493 年に 3 ヵ所に設けられたが、秀吉の壬辰倭乱で 1 ヵ所を残して焼失してしまった。李朝末期には 4 ヵ所＝安東太白(ﾃﾍﾞｸ)山、江陵五台(ｵﾃﾞ)山、茂朱赤裳(ﾁｮｸｻﾝ)山、江華島鼎足(ﾁｮﾝｼﾞｮｸ)山に再建された。

歴代王の施政と実績を年月日順に編年した「朝鮮王朝実録（李朝実録）」を初め、事業完了報告書（手本となるような先例）である「朝鮮王室儀軌」等の王室関係の重要な典籍が納められていた。

赤裳山史庫の「李朝実録」は総督府が強引に押収していった。その上、本来の持ち主である李王家に「贈呈」するといった本末転倒な事を行っている。

五台山史庫の「李朝実録」は略奪の後、寺内総督によって東京帝国大学に寄贈された。運悪く 1923 年の関東大震災で燃え尽きたが、貸し出し中の物などが残った。冊数については異論があるが、東京大学にあった「李朝実録」は 2006 年 5 月に「寄贈」と言う形式で合意され、返還された。「朝鮮王室儀軌」（宮内庁保存）は 2011 年 11 月「現地保存原則」に則り、韓国に引き渡す日韓協定が結ばれた。(5)

鼎足山史庫（江華島三郎城内）は創設（1660）年以来全く手つかずの状態であった。フランスが 1866 年に略奪したのは江華邑内にあった奎章閣の支閣（外奎章閣）の蔵書で、1993 年 9 月仏大統領が韓国訪問の際返還要請を受け入れたが、その後の進展はなかった。韓国は 2011 年 4～5 月にこれらの図書を 5 年毎に契約を延長する韓国への「永久貸し出し」という方式に切り替え、合意に達して順次引き渡された。

鼎足山史庫略奪の真犯人は河合弘民である。1908 年 12 月の江華島郡守から知事に当てた被害報告書で曝露された。憲兵 2 名が護衛を伴い伝燈寺（史庫管理者）を訪れ、書庫の鍵を強要したが断られ、斧で錠前を壊し書物を持ち出した。大韓帝国政府になすすべはなかった。日本警察も「調査を進めると憲兵隊と衝突する恐れがある。調査の続行を断念する。」として、統監政治を銃剣で支え絶大な権力を持つ治外法権的存在の憲兵隊に尻尾を巻いている。現在の京都大学図書館所蔵の「河合文庫」はその一部である。　（続）

＜参考文献＞

1. 李亀烈「失われた朝鮮文化－日本侵略下の韓国文化財秘話」南永昌訳、新泉社、1993.12.25
2. 黄壽永編「日帝期文化財被害資料・考古美術資料第二十二集」韓国美術史学会刊、1973.1.25。（李洋秀・李素玲共訳、補編韓国・朝鮮文化財問題連絡会議、2012.8.15）
3. 黄壽永編「韓国の失われた文化財（増補：日帝期文化財被害資料）」李洋秀・李素玲日本語訳、荒井信一監修。三一書房、2015.12.11
4. 朝鮮大学校朝鮮問題研究センター編集・発行「奪われた朝鮮文化財、なぜ日本に（南永昌遺稿集）」2020.8.15 発行
5. 荒井信一「コロニアリズムと文化財－近代日本と朝鮮から考える、岩波新書、2012.7.20